

といふので、小間物屋の亭主は、内職の蒔絵の漆を搾つてゐる処を、そのまゝ引立てられて行つた。

翌る日は、泥棒の事より、小間物屋の亭主が警察署で頸を締められて白状を強いられたといふ噂で、村中は持ちきつた。四五日すると、兎に角小間物屋の亭主は蒼い顔をして歸つて来た。

青葉が茂つて真夏が来た。一と頃、卯買の若い男が毎日村へ廻つて来た。或る日、その男は、小間物屋の店先に寝そべつて駄菓子を食べながら無駄話をしてゐる処へ、ふと奥から出て来た亭主と顔を合せると、顔色を変へてそゝくさと歸つて行つてしまつた。それきり、卯買の若い男の姿は見えなくなつたが、また一きり、村には「いつかの晩」の泥棒の話が繰り返された。

○
お世話になり、お世話申した、先住の瑞光和尚を十年前に葬送し、四年も掛つた勝沼家の面倒だつた相続問題も望み通りに片付け、たゞ一人の眞の身寄りだつた母親をも、やうやうの思ひで遠くから引取つて三年後、安らかな死に送つてこの寺に埋め得た勝沼うた女は、もう何時この世に眼を閉ぢやうとも、何の未練もない身の上だつた。

由緒ある旗本の娘として江戸に生れ、一度は人の妻女として華かに送つた月日もあつたが、それも遠い昔のこと、身の不仕合から入つて、長い間の寺住居に慣れ老いた今の身には、浮世の人の哀楽など、長じて聴くお伽噺よりも倦気なかつた。私など、死ぬより他にもう用のない身体でございますから、と、旧知のある家の主人に、昔ながらの江戸音爽かに、愚痴ならず話

して笑つたことも幾度だつたか。時折の病臥の折さへ、今度こそはと願つてみるもの、やがては自ら床を払ふ日が廻つて来て、品よく瘦せほそり、しろくくと、吹けば飛ぶばかりの軀一つでも、死ばかりは思ふにまかせなかつた。蓄へものも、身一つを養ふには少なすぎず、生きてゐて何一つ妨げること、てはなかつたが、たゞ、早い安らかな死ばかりが、老いたうた女の今は小兒のやうな罪ない願ひだつた。

やがて、難僧の頃から手塩にかけた現在の光鏡和尚の日々の所業に対する檀家の非難の声と、光鏡和尚の、自分のみ失せがしと見せる、眼口の打擲は、遂に、我と我が命を断たうといふ決意をさせた。うた女は静かに楽しい死の用意に掛つた。そして用意が残る方なく整ひ終ると、老女は、明けやすい夏の暁闇の中に、長年住慣れた寺の裏座敷の梁から吊下した真新しい晒布の紐に、小さな命一つを投げかけた。

老女の死が伝へられると、懇意だつた村婦たちに交つて、検死の人々も集つたが、老女のその品位ある最期の美しさに、並み見る人々は讃嘆の声を吝まなかつた。

二階の居間の床の枕辺には、遺書と懐剣とが並べてあつた。光鏡和尚が、私かに何よりも怖れた遺書には、案じた事は認められず、「武士の娘として首く、るが恥かしくは候へど頼みといたす懐剣さびつき申しぬくさへ叶はず候ま、……」との数行が、人々に、悲壯な涙と嘆賞の念を再び催させた。検死の役人に茶を出さうとして戸棚をあけた婦達は、残る隈なくあまりに片附きすぎてゐて、却つて手の出しやうがなかつた。